

中核派系と第四インター系の「中国論」について

革共同・中核派系の2分派、中央派の月刊『国際労働運動』(459)(2014/12/01)と関西派の藤田幸一論文(『展望』10号2012年1月10日)、および第四インター系の『かけはし』2344号(2014年11月3日)の岩堀論文を読んだ。感想を記し、同時に「中国論」の意義を確認したい。

2016年11月28日 大谷美芳

〈1〉現在の中国はどのような国家=社会なのか？

どのような生産関係、生産様式なのか？ 史的唯物論に基づく原始共産制、奴隷制、封建制、資本主義、共産主義のどれなのか？ 中核派系はこの点が共通にあいまいである。

革命の根本問題は国家権力の問題である。中国の党と国家が労農人民大衆と国内少数民族が搾取・収奪し抑圧・支配しているという情勢分析はあるが、しかし国家権力の階級的性格の規定があいまいである。それは革命党派にとっては問題である。現在の中国の国家はブルジョア階級独裁、生産関係は資本主義である。しかし、特殊な官僚制国家資本主義であり、「開発独裁」「権威主義国家」、古典的にはボナパルティズムのような特殊な形態である。ただし、普遍性は特殊性の中に存在するので、米国・西欧・日本も普遍的ではなく特殊なブルジョア階級独裁=資本主義であるが。

①革共同・中央派の見解

「スターリン主義は『世界革命を放棄し、一国社会主義建設を自己目的化した存在』『過渡期の反動的な固定化』である。『過渡期の反動的な固定化』といったばあい、本来この体制は延命できる再生産可能な独自の経済形態がそれ自身としてあるわけではないことを意味する。つまり本来、延命できない体制なのである。『エセ共産主義』として、あるいは帝国主義との政策的な対抗からも、農業の集団化や計画経済を当初は採用したのが現実の歴史の過程だったが、結局それ

は必然的に破産する。そしてこのような当初の政策が崩壊した時、スターリン主義者は、自分たちの権力と利権を守ろうとして、その体制の延命のためには、なりふり構わない、ご都合主義的にあらゆる経済政策を採る。」

これは史的唯物論に反している。原始共産制も奴隷制・封建制・資本主義も共産主義も唯物論的な基礎をもつ、歴史的に必然的な、再生産可能な生産関係であり、社会である。生産関係であれ社会であれ体制であれ、唯物論的な基礎をもたない、歴史的必然性のない、再生産不可能なものが、数十年にもわたって「ご都合主義的経済政策」で維持されることはありえない(かつてのソ連の国家=社会体制は現在のロシアに延命し再生産されている)。また、現在の中国の国家=社会をスターリン主義と規定し、それをブルジョア階級独裁=資本主義でもなく、プロレタリア階級独裁=社会主義でもないとしているようだが、そのような国家=社会は史的唯物論的には存在しない。結局、「反帝・反スターリン主義」の思想と理論ではスターリン主義は観念論的な「悪魔」になってしまう。

②革共同・関西派の見解

「『共産主義の復権と創造をかかげて』新たな運動を開始したわれわれにとって、現在の中国をどうとらえるかということは大きな課題である。『中国=スターリン主義』という規定や中国人民の主体を無視した『スターリン主義打倒の第二革命』の一言ですますことはできない。」

「中国は『改革・開放』をとおして資本主義国になったのであろうか。そうは単純に言えない。中国は中国共産党の一党支配のもと『社会主義』の名前をかかげてグローバリズムを積極的に取り込み、どこまでも推し進める独特の体制である。中国共産党・官僚とそれと結びついた『資本家』の利害をおい求めるものであり、『社会主義』・『中国共産党』の名前で独裁的な一党支配のもとで、中国人民を抑圧し、労働者・農民の決起・反乱を強権的な治安弾圧で圧殺している。共産党が『社会主義』の名前で『改革・開放』、グローバリゼーションの政策を推進し、中国人民をグローバル企業・資本家に差し出し、中国共産党・官僚と『資本家』が搾取・収奪をほしいままにして

いる。」

関西派は「反帝・反スターリン主義」を見直しているとも聞いている。しかし、ここで立ち止まると、現在の中国の国家=社会を、史的唯物論上の原始共産制と奴隷制・封建制・資本主義と共産主義のうちのどれでもないもの、ブルジョア階級独裁=資本主義とプロレタリア階級独裁=社会主義のどちらでもないもの、と見ることになる。それでは訳が分からない。「独特の体制」としているが、1.資本主義が遅れ、ブルジョア革命が遅れた、2.民主主義革命から社会主義革命への二段階革命の中で、共産党が指導する国家(プロレタリア階級独裁あるいは人民連合独裁)の下で生産手段が国家所有と集団所有となったが、その党と国家が官僚化し変質し転化して出現した、こういう「独特の」ブルジョア階級独裁=資本主義というように見解を進めるべきである。くり返したが、決して米国・西欧・日本が普遍なのではない。それを普遍とする「ヨーロッパ中心史観」を払拭し、普遍性は特殊性の中にあり、米国・西欧・日本も特殊、ソ連=ロシアも中国も特殊と考えるべきである。

③第4インター系『かけはし』の見解

「第四インターナショナルの中でも、『台頭する中国』について『形成途上の帝国主義』とする討論も始まっている。いま、中国の力と矛盾を現実的・歴史的にどう捉えるかは最大のテーマの一つである。この論議を進めるにあたっての論稿が岩堀同志から寄せられた。(編集部)」以上の事情の中での以下の岩堀敏論文らしい。

「墮落した労働者国家ソ連邦において官僚打倒の政治革命はついに成立することなく、一九九一年、ソ連邦は崩壊した。それは、資本主義の復活であるとともに、旧国家の崩壊であり、共産党の解体であった。これに対して中国では、ソ連邦のような劇的な姿をとることなく、長い時間をかけて資本主義が復活していった。国家も共産党も崩壊しなかったばかりでなく、いっそう強大な力を発動し続けているように見える。」

「天安門弾圧は、党は人民の圧力に妥協しないという全官僚に対するメッセージとなった。学

生・労働者の民主化を求める闘争を弾圧することによって、反資本主義から親資本主義への長期にわたる変化の最後の曲がり角を曲がり切った。中国共産党と労働者階級の関係は、対決し
かありえないことが明らかになった。国家と労働者階級との根本的な対立関係は、ここに確定さ
れた。このような漸進的な中国国家の階級の変質のもとで、中国共産党は、党機構を維持したま
ま資本主義に順応し、資本主義を指揮する党へと変質していった。だがその一方、世界第二位
のGDPを有するまでの経済成長をなしとげて強大な資本主義国家を築いたことが、共産党一党
支配の大きな基盤になっている。」

天安門事件を決定的な転機として、現在の中国をブルジョア階級独裁=資本主義と認めている
ようである。しかし、この論理だと、かつてのソ連は30年代の大粛清後も「墮落した」「官僚化した」
「歪曲された」などの形容がつくが「労働者国家」、つまりプロレタリア階級独裁=社会主義であり、
擁護の対象になる。感性的にも全くおかしい。30年代の大粛清こそ国家がスターリン主義の官
僚主義による変質で遂にブルジョア階級独裁に転化した決定的な転機である。その下での国家
所有と集団所有も官僚制国家資本主義に変質・転化した。

またさらに、この論理だと、ソ連・東欧体制の崩壊は、曲がりなりにもプロレタリア階級独裁=社
会主義であったが、ブルジョア階級独裁=資本主義に転化した反革命と規定される。これも感性
的にも全くおかしい。資本主義から帝国主義に発展したソ連に支配され従属国であった多くの東
欧諸国にとっては民族的国家的に独立した革命である。ソ連と、一部の民族的国家的に独立し
ていた東欧諸国にとっては、ブルジョア階級独裁は変わらないがその民主化、改良であった。

結局、「官僚化した労働者国家」とか「補足的な第二政治革命」とかのトロッキズムの伝統的な理
論では事態を説明できず総括できない。

〈2〉なぜ積極的にブルジョア階級独裁=資本主義と認識すべきなのか？

中国がブルジョア階級独裁=資本主義であることは唯物論的現実で、結局は承認される。しか
し、受け身的に承認するのではなく、積極的に認識しなくてはならない。なぜか？

①□ 明確に規定することはマルクス主義の社会主義革命論の原則的立場に立つこと

三者とも、中国の労働人民大衆と国内少数民族が搾取・収奪と抑圧・支配に反抗し闘争している情勢分析をして、プロレタリア階級独裁・社会主義革命を主張するだろう。

当面する革命の性格は国家=社会の性格に規定される。だから、現在の中国におけるプロレタリア階級独裁・社会主義革命を主張するのであれば、現在の中国の国家=社会がブルジョア階級独裁=資本主義であることを明確に規定しなくてはならない。

また、マルクス主義の社会主義革命論の原則は、社会主義革命の根拠を資本主義の中に求める。資本主義における生産関係と生産力の矛盾が社会主義革命をもたらし、資本主義は生産の社会化とプロレタリア階級の階級闘争として社会主義革命の物質的基礎と原動力を準備する。プロレタリア階級独裁は、資本主義の生産関係=階級関係に規定されたプロレタリア階級のブルジョア階級に対する階級闘争の発展である。したがって、現在の中国におけるプロレタリア階級独裁・社会主義革命を主張するのであれば、現在の中国が資本主義であることを明確に規定しなくてはならない。

ブンドだけでなく新左翼全体が小ブルジョア急進民主主義であったために、結局は社会主義革命を主意主観で実行しようとして挫折し破綻した歴史がある。だから、マルクス主義の社会主義革命論の原則を確認することは極めて重要である。

②変質・転化の総括がマルクス・レーニン主義の社会主義革命論の現代的発展と適用

現在の中国やかつてのソ連はどのように変質・転化したのか？ 中核派系も第四インター系も、スターリン主義を一国社会主義と規定し、官僚主義の原因を一国社会主義に求め、ここから変質・転化を説明する。しかし、なぜ一国社会主義なら官僚主義になるのか？ なぜ世界社会主義なら官僚主義にならないのか？ 論理的に説明できていない。

(1) 官僚主義

第1に、資本主義は「労働と所有の分離」、資本家階級の生産手段独占と労働者階級が生産手段からの分離である。反対に、社会主義は「労働と所有の再結合」、資本家階級を収奪して労働者階級が生産手段を共同で所有する。だから、プロレタリア階級独裁の下での生産手段の国家所有と集団所有は、労働者階級による共同所有であり、社会主義である。このように一国社会主義は可能で必要である。意義は搾取の廃止である。

第2に、官僚主義は、一国か世界かに関係なく、奴隷制・封建制・資本主義を通じた国家をテコとした階級支配の歴史的産物であり、生産関係の三側面のうちの生産における人と人の関係に、そこでの精神労働による肉体労働に対する指揮に最深の基礎がある。

第3に、官僚主義が国家を支配したため、官僚が国家所有と集団所有の生産手段を独占してブルジョア階級となり、国家はブルジョア階級独裁に、生産関係は官僚制国家資本主義という特殊な資本主義変質・転化した。これがスターリン主義である。

(2) . 継続革命

だから、反官僚主義、反スターリン主義の闘争は、国家のコンミュン・ソヴィエト型国家、「人民型国家」への発展である。それには経済的基礎が必要である。生産関係の三側面のうち、②生産における人と人の関係=労働関係で、労働者が経営に参加し、労働指揮を学び経験し、肉体労働だけでなく精神労働も行う。③分配制で、「能力に応じて労働し労働に応じて取る」基準で消費生活分を分配された後、労働者が生産の維持・拡大・発展のための蓄積分に対する支配と経営の権限も行使する。個々の企業だけでなく、産業全体、工業と農業など産業部門間の関係、国全体の生産と経済に対しても労働者階級が参加し管理する。一言で言えば、「生産と労働の大衆的管理」、これが①所有制を真に労働者階級の共同所有とし、国家を真にコンミュン・ソヴィエト型の「人民型国家」とする。これがプロレタリア階級独裁と社会主義の関係であろう。

これが毛沢東思想の「社会主義におけるプロレタリア階級独裁の下での継続革命」であろう。また一言で言えば、政治と経済、国家と社会の全分野で広く深くブルジョア階級の資本主義と闘

争してプロレタリア階級の社会主義を打ち立てることであろう。しかし提起したが提起だけで終わり実行は失敗した。中国の文化大革命は、実は 1949 年の民主主義革命に続く社会主義革命であったが、プロレタリア階級独裁を「革命委員会」として実現した後、継続革命の実行に失敗し、国家=社会が大混乱した。破壊した「四人組」、折衷主義で終わった周恩来・華国鋒、收拾した鄧小平。しかし、その收拾はブルジョア階級の資本主義であった。官僚制国家資本主義。

(3) . 社会主義革命論の現代的発展と適用

中国文化大革命=社会主義革命の敗北は、1920・30 年代におけるヨーロッパの社会主義革命の敗北が、ブルジョア階級の独裁=暴力への敗北であると同時に、政治と経済、国家と社会の全分野でのブルジョア階級の広く深い支配力への敗北であったことに通底する(グラムシの「ヘゲモニー」の問題)。そうすると、その総括は、スローガン化すれば「政治と経済、国家と社会の全分野で広く深くブルジョア階級独裁=資本主義に対して批判し闘争し、プロレタリア階級独裁・社会主義革命を準備し組織する」「全社会的対抗運動」となる。現在の中国の問題が現在のアメリカ・ヨーロッパ・日本などにも共通する。

マルクス・レーニン主義は、普遍的な社会主義革命の理論であるが、歴史的に特殊な条件の中で形成されている。つまりブルジョア民主主義革命に直面する中で、これを客観的な与件として、主体的にはプロレタリア階級が革命を徹底して社会主義革命に前進することを目指した(結果的には敗北したが)、この二段階革命の実践を基礎としていた。またくり返したが普遍は特殊の中にある。ロシア革命、中国革命など 20 世紀までは世界史的にはブルジョア民主主義革命の時代であった。

ロシア、中国などの社会主義革命の敗北と変質・転化は、実は革命がブルジョア革命として終わったということである。これは第三世界とりわけアジアにおける「開発独裁」「権威主義国家」による上からのなし崩し的なブルジョア革命の進行と相通じる。この結果、資本主義が全世界的に発展した。グローバリズム。しかし、産業資本に取って代る金融資本・マネーの支配で、資本主義

の矛盾が広く深く成熟し噴出しつつある。直接の社会主義革命に直面する国々が世界中に拡大し、それらの国々でプロレタリ階級・人民の闘争が広く深く発生・発展し、「全社会的対抗運動」となるだろう。21世紀は帝国主義と社会主義革命の時代の本格化であり、マルクス・レーニン主義の社会主義革命論の現代的発展と適用の時代であろう。